

WiN-Japan, ブルガリアの年次大会で福島事故の概要を紹介

原子力産業に従事する女性を中心に組織されるWiN (Women in Nuclear)は6月6日から10日までの5日間、ブルガリアで第19回WiN-Global年次大会を開催した。22カ国約150名が参加した大会の冒頭には「フクシマ特別セッション」が設けられ、日本から参加したWiN-Japan(会長・小川順子東京都市大学准教授)6名が、福島第一原子力発電所事故の概要、技術的対策、放射線の環境影響と避難状況、得られた教訓等について発表を行った。この中でWiN-Japanは、より安全な原子力技術の確立と原子力発電を続けるためのコミュニケーションの再構築が課題であることを指摘し、参加者からは「福島の住民はいつ戻ることができるのか」、「チェルノブイリの教訓が活かされていないのでは」などの質問が寄せられた。

その後、各国のWiNが「フクシマ」後の取組みについて報告を行い、WiN-Globalは「フクシマ宣言(Fukushima Declaration)」を採択した。宣言には、福島を機に、原子力産業に従事する女性たちが、国際標準の安全基準や規制を作り上げるためにあらゆる努力をし、子供たちの将来のために強力な支援と貢献をすることが盛り込まれた。これと併せて募金が行われ、各国から集まった義捐金(約40万円)は、福島第一原子力発電所



に全額寄付されることとなった。

また、年次大会に先がけて、WiN-Japanは6月3日、国際原子力機関(IAEA)本部で天野事務局長と懇談した。このなかで天野事務局長は、「福島後、原子力安全は変わったと言えなければならない」と述べ、「フクシマ」の教訓は世界の原子力安全の向上に生かされるべきだと強調した。

(資料提供：WiN-Japan)